

音楽情報

バルトリ健在

本当に枯れることのない才能と情熱を  
持っている者は、コロナ禍にも打ち負か  
されないのだ。チェチーリア・バルトリ  
の新譜『ファリネッリ』コンサートツアー  
は、観客に力を与えた。このところツ  
アーから外されることも多かったチュ  
ーリヒだが、今回はコンサートエージェ  
ントのホフリが5月10日に招聘していた  
のが、ロックダウンのため、8月のル  
ツェルン音楽祭やザルツブルク音楽祭で  
披露したあとの9月1日に実現した。1  
日2回公演の初回を所見したが、声やエ  
ネルギーを出し惜しみすることなく、  
カンツォーネ《忘れな草》にまでいたる  
4曲のアンコールで、観客を喜ばせた。  
「ヘンデルとその時代」と題されたコン



バルトリの『ファリネッリ』コンサートツアーから。写真はルツェルンで行われたもの  
©Peter Fischli / Lucerne Festiva

サートは《リナルド》の「シンフォニア」  
から始まった。助手役の俳優が可動式の  
楽屋を舞台下手にセットし、短髪でさっ  
そうと登場したバルトリが、ホルボラ  
《ヒメナエウスの饗宴》と《ポリフェー  
モ》のアリアを歌うと、弱声で長いフ  
レーズが心に沁みる。切ないテオルボを  
筆頭に、「モナコ大公の音楽家たち」の響  
きを堪能したあとは、《時と悟りの勝利》  
の《私を泣かせてください》を、止まる  
ほど遅いテンポと弱音で歌い、泣かせ  
た。続く《ジュリオ・チエーザレ》では、  
クレオパトラを歌うために舞台上でカツ

ラを替えたり、着替えたり、化粧を施し  
ているバルトリを目で追ってしまい、  
「シンフォニア」には集中できなかった  
が、アリアは堪能した。

テレマン「トランベツト協奏曲」のあ  
と、《ガウラのアマディーシ》から、オー  
ボエとトランベツトが絡むアリアでは、  
いつものように各楽器で技を競い合い、  
笑いを取った。ヴィヴァルディ「フルー  
ト協奏曲」に続いて、《怒れるオルラン  
ド》よりルツジェーロのアリア《ただ君  
によってのみ、私の優しき愛の女よ》を  
仮面姿で歌い、黙役に促されて踊ったフ

ラメンコのような踊りが、  
上手で驚いた。チェロのソ  
ロが雄弁な《アリオダンテ》  
のダンス組曲を挟んで、《リ  
ナルド》からアルミレーナ  
のアリアを、偽物の鳥を飛  
ばしながら歌ったバルトリ  
は少女のよう。最後はこの  
コンサート副題にもなっ  
ている《聖セシリアの日の  
ためのオード》から《音楽が  
かき立てたり和らげたりで  
きないのはどんな情念なの  
か》でしつとりと終えた。

音楽を楽しむ喜びにあふ  
れ、それを少しでも多くの  
聴衆と分かちあおうとする  
ポジティブなパワーにあふ  
れていて脱帽した。(共演…  
ジャンルカ・カプアーノ指  
揮モナコ公の音楽家たち)

ステージ上で弾くよりも、オーケスト  
ラ・ピット内でオーケストラがソーシャ  
ル・ディスタンスを保つのはむしろかし  
い。客席数列を潰して、いつもより高い  
場所にピットを作る歌劇場もあるが、  
チューリヒ歌劇場は1000人以内とい  
う、人数制限ギリギリまで観客を入れら  
れる効果もある賭けに出た。オーケスト  
ラと合唱団が近くの練習場で演奏した音  
が、光ファイバーケーブルを使って光速  
で劇場に送られ、指揮者のモニターを見  
て歌う舞台上の歌手と共演するというシ  
ステムを作り上げたのだ。そしてパ  
リー・コスキーの新演出では、群衆の合  
唱を、積み上げられた本たちに歌わせた  
ムソルグスキー《ボリス・ゴドノフ》で、  
9月20日に新シーズンが開幕した。キ  
ル・カラビツ指揮フィルハーモニア・  
チューリヒも健闘したが、60本のマイク  
で拾った音を忠実に届けるという精密さ  
が仇となったのか、ふだん目立たない内  
声が聴こえすぎるなど、違和感は否めな  
い。

キャストでは、ランゴ二役のヨハネ  
ス・マルティン・クレンツレが初役とは  
思えない存在感を放ち、当歌劇場のドニ  
ゼッティ《ドン・パスカール》題名役  
を好演したときはまた違った演技で、  
確実な歌唱を聴かせた。マリーナ役のオ  
クサナ・ヴォルコヴァ、グリゴリ役のエ  
ドガラス・モンヴィダス、白痴役のスペ  
ンサー・ラングも好演し、政治的サスペ

チューリヒ歌劇場の賭け



## スイス NOW

新型コロナウイルス  
関連情報

### 1000人を超える イベントの規制緩和

スイス連邦政府は9月2日、「10月1日から1000人を超えるイベントの禁止を、慎重かつ厳格な措置の下で緩和する」と発表した。その承認基準として着席形式であること、感染者の追跡ができること、イベント主催者は感染防止コンセプトを州に提出することとされているが、この申請に各団体は神経を尖らせている。

連邦レベルのアイスホッケーおよびサッカーの試合は客席総数の3分の2を上限とし、マスク着用による着席のみの開催が認められるが、とくにアイスホッケーでは採算が取れないと危惧されている。

今月は帰国後に10日間の自己隔離を要する地域がフランスやオーストリア、イタリアの一部にも拡大し、オランダ、ポルトガル、スロベニア、デンマーク、アイルランド、アイスランド、ルクセンブルク、ハンガリー、英国も含まれる62カ国に広がっている。反対にフィンランドやスウェーデンはスイスからの渡航者に自己隔離を要請する決定を下したため、チューリヒ・トーンハレ管弦楽団のシーズン・オープニングでソリストを務めるはずだったオリ・ムストネン (p) がスイス入国を断念し、ラルス・フォークト (p) に代わった。結果的にはベートーヴェンらしさがあふれる力強い「ピアノ協奏曲第4番」となった。

会場のトーンハレ・マーズは客席1席に対し、前後左右を1席ずつ空けた「チェス盤状」を厳守しており、同伴者との間にも1席空けられることに不満な聴衆も見受けられた。演奏曲数も休憩不要の長さに抑えるため、9月23日から3日間、1日2回公演を強行した。反対にチューリヒ歌劇場は、満員の客席に空調が感じられない閉塞感があり、休憩も再び導入されたため、不安な声も聞かれる。

身近なところではチューリヒの隣の中学校で学級閉鎖があったが、PCR検査の陽性率はわずかではあるが下がり続け、9月末で4.6パーセントとなっている。接触追跡アプリは161万台のデバイスで稼働しており、効果的に自己隔離を誘導している。



トーンハレ管のシーズン・オープニングのソリストはムストネンからフォークトに代わった  
©Alberto Venzago

5日後には、4月にプレミエを迎えるはずだったカールマン《チャールダーシュ侯爵夫人》新演出がやっと上演されたが、注目指揮者のロレンツォ・ヴィオッティは、この新しい形態では存在感を出せなかった。舞台上にはソリストとミュージカル・ダンサーのみだが、演者としての彼らはパワフルで、主演のアンネット・タッシュも最初の歌から観客を手中に収めた。しかし歌唱レヴェルでは



光ケーブルによる通信を使うなど、新しい試みを行ったチューリヒ歌劇場の《ボリス・ゴドノフ》から。ボリス・ゴドノフを歌ったフォッレ ©Monika Rittershaus

新進歌手のころの精緻さの影もないダッシュと比べ、エドウィン役のパヴォル・プレスリクはオペレッタでも端正な歌を聴かせた。ボニ役のスペンサー・ラング、フェリ役のマルティン・ツイッセット、スタージ役のレベカ・オルヴェーラも芸達者ぶりを発揮した。ジャン・フィリップ・グローガーの演出は、全幕を船上で起こった出来事として扱い、南極を想定した動物たちが出てきたりして観客を喜ばせたが、その動物たちは廃棄プラスチックで死んでいたり、宇宙船となった背後で地球が爆発したり、と重苦しい。第一

次世界大戦中に初演されたオペレッタを、現代が直面する問題と重ねて表現したいのだろうが、中途半端なまま終わった。

この2公演のあと、ヴェルティ《シチリア島の夕べの祈り》に出演予定だったが、歌手たちによるヴェルティ・ガラを聴いたが、1曲目に《シチリア島》の序曲が舞台上から流れてきたときから、乾いた土が水を吸い込むように生の音が心に沁みこんでいくのを感じた。生演奏とは、こんなに貴重な体験なのだということ、劇場閉鎖時以上に身にしみた瞬間だった。チューリヒ歌劇場の賭けは、残念ながら負けたのだ。出演者のマリア・アグレストア、ブライアン・ヒメル、クイン・ケルシー、アレクサンダー・ヴィノグラドフ、イルド・ソンとファビオ・ルイジ率いるフィルハーモニア・チューリヒが与えた生の感動に感謝した。